

第 152 回フランス・アラカルト「多言語国家スイスでの暮らし」

3 月 18 日 (土)、生駒セイセイビル会議室にて第 152 回フランス・アラカルトが開催され、香芝市国際交流員のトリスタン・クレマンさんが「多言語国家スイスでの暮らし」をテーマに講演されました。クレマンさんの工夫をこらしたプレゼンテーションと達者な日本語力、参加者 15 名のほとんどがスイス旅行の経験者だったことなどから、活発な質疑応答がなされました。質問は翌朝まで続きそうな勢いでしたが、それも日本人以上に日本人みたいで話しかけやすいクレマンさんのお人柄ゆえでしょうか。(浅井直子)

クレマンさんは、NHK のアナウンサーのような美しい標準語でスイスの文化と歴史について話をされた。特にジュネーヴを中心とするフランス語圏とチューリッヒを中心とするドイツ語圏の違いなどは大変興味深かった。フランス語圏の人々は明るく、ドイツ語が苦手、ドイツ語圏の人々は勤勉で、フランス語をしゃべる人が多いとのこと初耳であった。クレマンさんは、近代言語学の父、ソシュールがかつて教鞭をとっていたジュネーヴ大学で学ばれた。大学では日本語学と言語学を学ばれたそうである。彼の天才的語学力はこのような環境が影響しているのかもしれない。(角田 茂)

日本は人口が 1 億 2,500 万人で、少子化が緊急の課題になっています。それに比べて、スイスは 865 万人なのに世界の中で存在感があります。クレマンさんにアドバイスを求めたところ、大学教育の違いを挙げられました。日本では、「大学はどこ？」と聞かれるが、スイスでは大学の教育が統一されていて、イノベーションを続けているということでした。(藺田章恵)

スイスについて、なんとなくなじみがあり、知っているつもりでいましたが、今回のクレマンさんの話を聞いていて、ほとんど表面的なことしか知らなかったと思われました。映像資料を使いながら話される内容が、ほんとうにわかりやすく、あらためて、スイスという国についてもっと知りたいと感じました。言語のこと、行政のこと、地理的特色のことなど。マッターホルンはフランス語では何と言う？ 首都はベルンだが、憲法には書かれていない、日本の憲法でも同じように規定がないでしょう、などと合間合間に問いかけをされ、聞いている私たちは虚を突かれたような感じで、そういえば・・・と話に引きずり込まれました。参加された皆さん感心したと思いますが、クレマンさんの日本語の流暢さは格別です。外国人特有のイントネーションもなく、日本人そのものの話しぶりでした。たまに関西弁のアクセントが混じるのもご愛敬でした。クレマンさん、本当に楽しいお話をありがとうございました。次の機会があれば、スイスにおける日本文学の受容やクレマンさんの好みを聞かせてください。(白鳥保二)



Je vous remercie de m'avoir invité. La Suisse—romande de surcroît—n'est selon moi, et en dépit de nos similarités, pas encore tout à fait bien connue au Japon. C'est pourquoi j'ai été très agréablement surpris d'apprendre qu'une importante majorité des membres présents s'y étaient rendus au cours de leur vie. Il est évidemment impossible de faire le tour d'une culture si multiple en seulement quelques heures, mais j'ai eu énormément de plaisir à partager avec vous mon pays ; ma région ; ma culture. J'ai beaucoup apprécié les questions pertinentes de chacun, qui ont véritablement sublimé ce moment d'échange. Merci encore. (Tristan Clément)



お招きありがとうございました。スイス、さらにはフランス語圏のスイスのことは、私たちの国はとも似ているにも関わらず日本でまだよく知られていないと思っていましたので、参加者のみなさんの多くがこれまでの人生でスイスに行ったことがあると知ったのは嬉しい驚きでした。多種多様な文化について短時間でひととおり紹介することはもちろんできませんが、私の国、私の地方、私の文化のことを、みなさんと分かちあえたことは大きな喜びでした。参加者各自の適切な質問がとてもよかったです。それがこの交流の価値を高めたように思います。あらためて感謝いたします。(トリスタン・クレマン)

第59回奈良日仏シネクラブ例会(2/26) 報告

◆◆『シェルブールの雨傘』のジャック・ドゥミ監督の第一作『ローラ』が観たかった。冒頭シーンはナントへ続く海岸線を白いキャデラックオープンカーが疾走する。運転する白いジャケットの男性が、ローラが7年間待ち続ける初恋の相手ミシェルだった。ローラはキャバレーでダンサーをしながら忘れ形見の息子を育てている。長い脚に黒の網タイツが印象的だ。二人の男性が言い寄り、そして去っていく。水兵フランキーはシカゴに帰る。ローランは遅刻常習で解雇され、宝石の密輸に手を出しそうになる。「ここでは生きていけない。旅に出たい」。旅立ちの衝動に突き動かされる渡り鳥のようにみえる。ラストシーンでは、スーツケースひとつ提げて港に向かうローランと、初恋が成就しアメリカに旅立つローラと交差する。振り返るローラの表情からハッピーエンドは読み取れない。それぞれの新しい物語を予感させる旅立ちである。映画を観終わった私の胸に、ナントへの旅情があふれてくる。バルバラはシャンソンの名曲「ナントに雨が降る」を残した。ついには帰りに着くナント、再会が死の時であったとしても。バルバラは歌う♪放浪の後に 彼は私のところに戻ってきた 彼が去ってからの長い間 私は待ち望んでいた♪ 死はまた永遠への旅立ちでもある。(小林安貴子)

◆◆参加者の皆さんが、上映作品に関連する映画の題名、俳優・監督の名前、音楽などについて、テンポよく滑らかに話されるのを聞いていて、ただただ凄いと驚くばかりです。配布資料には、映画のストーリー、俳優や監督のプロフィール、音楽について、幅広く情報が集められていて、家に帰ってからゆっくり読んでみると、「ここがあのシーンやな...」などと、理解が深まります。ストーリーだけでなく、フランスの町の様子、人々の生活、部屋の調度品、庭の花たち、俳優さんの着ている洋服など、場面ごとに調和している様々な映像に直に触れられるのが、映画を見る楽しみになっています。映画のスクリーンに映し出される情景に惹かれます。『ローラ』の舞台になったナントの町には、かつて家族で訪れたことがありましたので、風景がとても懐かしく感じられました。さて次は、どのような町に出会えるでしょう。楽しみです。(中西ツヤ子)

◆◆『ローラ』(1961)のローラン・カサルは、ナントで幼なじみのローラ(アヌーク・エーメ)と再会しプロポーズするが初恋の男性を待つ彼女にふられ、失意のうちにナントの港から旅立ってゆく。『シェルブールの雨傘』(1964)に再登場したカサルは宝石商となって、シェルブールでジュヌヴィエーヴ(カトリーヌ・ドヌーヴ)に出会い、失望していたそれまでの人生に別の意味を持ったと彼女の母親に打ち明け、失意にあった身重の彼女にプロポーズし、二人はパリで暮らす。『ローラ』と『シェルブールの雨傘』の間に、カサルはどんな人生を送っていたのか? いっぽう、『ローラ』で長年待ち続けた恋人とナントで再会したローラは、新たな人生への希望を抱いてナントをあとにする。『モデル・ショップ』(1968)では、アメリカに渡ったローラが描かれるがその表情にはナントの時のような輝きがない。それでも彼女は新たな希望を持ってフランスに戻っていく。『ローラ』と『モデル・ショップ』の間に、ローラの人生に何があったのか? ジャック・ドゥミの作品には、映画には直接描かれていない大小様々なドラマが秘められていて、物語を紡ぐのは観客にゆだねられている。人生の幸福も残酷もすべて肯定するドゥミの世界の根底には、ギリシア悲劇的な人間観があるのかもしれない。音楽劇やおとぎ話のような物語を通じて、喜びや希望を原動力に未来を生きようとする人々を描き続けるシネアストの姿勢に共感する。(浅井直子)

第60回奈良日仏シネクラブ例会『ロバと王女』(ジャック・ドゥミ特集②)

❖日時: 2023年7月30日(日) 14:00~17:00 ❖会場: 奈良市西部公民館5階視聴覚室(予定)

❖プログラム: 『ロバと王女』(Peau d'âne, 1970年, 90分) ❖監督: ジャック・ドゥミ ❖予約不要

❖参加費: 会員 200円、一般 300円 ❖問い合わせ: Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300 (浅井)

❖プレゼンターよりのメッセージ: ジャック・ドゥミ特集の2弾目として、ミシェル・ルグランの音楽、カトリーヌ・ドヌーヴの主演によるミュージカル『ロバと王女』(原題「ロバの皮 Peau d'âne」1970年)を取り上げます。同じトリオにより制作された『シェルブールの雨傘』(1964年)『ロシュフォールの恋人たち』(1967年)に続く作品ですが、前二作がドゥミ自身により脚本が書かれたの対して、こちらは原作があります。「眠れる森の美女」などで知られるシャルル・ペロー『昔話集』(17世紀末)のなかの一篇「ロバの皮」で、フランスではよく知られた物語です。ただ、内容が近親相姦的欲望を描いたものなので、日本の子ども向けの本には収録されていないようです。この題材をもとに、ドゥミは、華やかな色彩で繰り広げられる魅惑的な恋愛ファンタジーを作り上げました。フランス国内の観客動員数は220万人にのぼり、ドゥミ最大のヒット作となりましたが、きっと家族連れが映画館へ詰めかけたのでしょう。(三野博司)



法人会員紹介 ワインショップ「サン・ヴァンサン」 <https://stvincent.shop-pro.jp/>

サン・ヴァンサンでは、お手頃で良心的な価格の美味しいワインを沢山とり揃えております。一人でも多くの方に、ワインの素晴らしさをお伝えしていければと思っております。

ブルゴーニュ地方は、一番北に位置するシャブリ地区から一番南に位置するボジョレー地区まで、南北にとっても広い範囲に広がっています。今回ご紹介しますワインは、ブルゴーニュ地方南部、マコン市の南に位置するマコネ地区のヴィレ・クレッセというエリアのワインです。ヴィレ・クレッセは、プイ・フュッセやサン・ヴェランと並んで、独立した AOC（原産地呼称）が認められているマコネ地区の中でも特に人気のエリアで、コスト・パフォーマンスに優れた隠れた銘醸地ですが、近年大変注目されているエリアです。

造り手のドメヌ・ロアリーはヴィレ・クレッセの中でも特に人気の高い生産者です。ブドウの栽培は以前からずっとビオロジックで行われており、ワインは開けた瞬間から蜂蜜や黄桃といった華やかなアロマを持ち、味わいはとてもリッチな果実味とまろやかな酸味のバランスが良くとれていて十分な旨味を持ったワインです。



- ◆ ワイン名：ヴィレ・クレッセ 2019 年
- ◆ 生産者名：ロアリー
- ◆ 上代価格：3,200 円（税抜き）
- ◆ 特別価格：2,500 円（税抜き）

奈良市学園朝日町 2-2 米田ビル 102
 Tel : 0742-43-3832
 定休日：毎週月曜、第 2・第 3 火曜
 営業時間：10:00～19:00
 店長：竹中宣人（たけなか のりひと）

定年後のフランス人旅（1）

中浦 東洋司（なかうら とよじ）

2001 年にそれまで勤めていた大阪市庁を退職しましたが、在職中にはフランスのル・アーブルとの姉妹港提携や大阪南港のワイン博物館の設立等の業務を担当。これも大阪外国語大学（現在は大阪大学）で仏語を選択したお陰で、市長や副市長に付き添って渡仏したり、来阪するフランス客のアテンドをしたりしていました。その中にはフランソワーズ・モレシャンさんやオードリ・ヘップバーンさんもおられました。

定年後は、仏語の資料とくに技術文献の翻訳を引き受けたり、趣味で好きな平安文学の仏訳をしたりしていました。2005 年には個人でフランス・ツアーを企画して、知人 10 人ほどを引率してフランス各地を巡りました。ランスの大聖堂やシャンパーニュのカーヴ見学、ロワール地方のシャンボール城訪問等を日程に組み込み、パリでは自由行動にしましたが、モンマルトル界限で、日本人観光客から大阪弁で話しかけられて驚いたことをよく覚えています。約 10 日間の旅の途中にはハプニングもありましたが、後日、ツアーに参加した人たちが感謝の言葉をかけてくださり、私のフランス語が人様のお役に立てたことが嬉しく思われました。

実をいうとこのツアーの 4 年前、2001 年の定年退職直後に、自由な時間ができたので、念願だったフランスへの一人旅をしていました。あの 2 週間ばかりの旅で経験したことは、生涯忘れがたい思い出です。

私がぜひとも訪れたかったのは、仕事で関わったル・アーブルの港です。ル・アーブルを訪れるのは 2 回目でしたが、列車で行くのは初めてでした。

列車が出るのは、モネの絵画でもよく知られているパリのサン・ラザール駅からです。パリの六つの主要駅（北、東、サン・ラザール、モンパルナス、リヨン、オステルリッツ）の中で私がもっとも好きな駅で、北駅の次に利用者数（主に通勤者）が多く、いつも多くの旅行者や地元客で賑わっています。駅名はキリストの使徒の一人で主イエスが死からよみがえらせた聖ラザロに因んでいるのだそうです。サン・ラザール駅からル・アーブル行の列車に乗り込むと、いよいよ旅の始まり。子どもの頃に帰ったように、胸がわくわくしていました。



上：ル・アーブル港 下：サン・ラザール駅

ブルースト雑感 (5) 日本人庭師との出会い 浅井直子 (あさい なおこ)

1889 (明治 22) 年 5 月 5 日～11 月 6 日の半年にわたって開催されたパリ万博では、トロカデロの日本庭園・あずまや・植物の展示が人気を呼んでいました。当時パリではジャポニズムが流行していましたが、この日本園をいたく気に入って、そこで習慣的に散策や読書をしたり、友人たちを案内していたパリ市民がいました。同じトロカデロ地区に住んでいたロベール・ド・モンテスキュー伯爵 (1855-1921) です。

モンテスキューといえば、ユイスマンスの小説『さかしま』の主人公デ・ゼッサントや、ブルーストの『失われた時を求めて』のシャルリュス男爵のモデルとして知られる人物です。彼はフランスの由緒ある大貴族の家に生まれ、詩人・美術収集家・ダンディズムの体現者であり、熱狂的な日本愛好家でもありました。モンテスキューは、万博期間中トロカデロの日本園の園芸展示に携わっていた畑和助 (はたわすけ, 1865-1928) という日本人庭師に出会って、彼の能力に惚れこみます。万博終了後には、彼を雇って自分の邸宅に日本庭園を造らせたり、彼の仕事を様々な人に紹介したり、自身の詩作品の中に彼の名前を書き入れたり、書簡や文書にも彼のことを記して、彼を芸術的庭師として高く評価しました。

ブルーストが社交界のサロンでモンテスキューと出会ったのは万博後の 1893 年、20 代前半の文学青年時代、ちょうど彼がパリの邸宅の庭を畑和助の手によって日本風にアレンジしていた時期です。モンテスキューは翌年 1894 年にヴェルサイユに転居し、そこに「温室」を作って畑和助に日本の盆栽や植物の手入れをさせていました。ブルーストはモンテスキューのパリとヴェルサイユのいずれの邸宅にも招かれていて、畑和助の仕事ぶりを目にしていました。ブルーストの作品には、植物や庭園がしばしば重要なモチーフとして登場するのですが、そこには畑和助の影響のあることが、今年 3 月に出版されたばかりの鈴木順二さんの著書『園芸のジャポニズム 明治の庭師ハタ・ワスケを追って』(平凡社、2023 年) によって、明らかにされています。

具体例としては、『失われた時を求めて』第 1 篇『スワン家のほうへ』の中に、「相手の女性に愛していると告白する歓びを断念することによっていっそう相手の好意を惹こうとすることもあり、これなどは日本の庭師が一輪のみごとな花を咲かせるために残りの花はどんどん摘んでしまうのに倣ったものといえよう」(吉川一義訳、岩波文庫第 2 巻、p. 463) という文章が挙げられています。文中の「日本の庭師」の園芸手法は畑和助の「菊の花」の栽培方法について、モンテスキューがブルーストに話した言葉からヒントを得たものでした。

第 5 篇『囚われの女』では、主人公の恋人アルベルチーナが、アイスクリームを食べながらその形について話すとき、「アイスクリーム」を「盆栽」に喩えています。一見かけ離れていると思われる二つのものの間に橋をかけて類似性を見出そうとするブルーストらしい比喻ですが、彼はじっさいに盆栽をいくつも購入して、好んで盆栽を眺めていました。親しい女性詩人への書簡で、盆栽を想像力の目で眺めると、小さな樹木を巨大な樹木として見るができる、と記しています。第 1 篇『スワン家のほうへ』では、水の中に入れると小さな紙片が大きく伸び広がる日本の「水中花」の比喻が用いられていました。盆栽と水中花はいずれも、「伸展」と「縮約」の想像力の運動を目に見える形で表現するものとして、ブルーストの小説の基礎をなすヴィジョンの形成に寄与しているようです。そのブルーストが盆栽を愛好するようになったきっかけは、モンテスキュー邸で畑和助が育てた盆栽を目にしたことでした。

これまでフランスのジャポニズムに関する研究は、浮世絵に代表される絵画や工芸品などの美術を中心に成り立っていて、「園芸」に関して、とりわけ畑和助の貢献については、研究者や一部の人々の間でしか知られていませんでした。鈴木順二さんの著作は、日本人庭師や日本の植物がフランスの文化に与えた影響を詳細に明らかにする、とても意義深いものです。そして、この本が出版される日を待たずして、昨年 10 月に著者自身が病で逝去されていることを知った時、言葉ではいい表わせない衝撃がありました。

畑和助の存在自体はモンテスキューの文書やゴンクール兄弟の日記にも記されていますが、鈴木さんはこれまで知られていなかった彼の生涯を実証的に跡づけて、パリ万博後も現地にとどまり、大貴族や富豪に雇われて日本庭園を造園し、園芸コンクールでたくさんの賞を受賞し、フランス国家からも表彰され、フランス人女性との結婚と離婚を経て、1928 年 (63 歳) 病没し、ブローニュ＝ビヤンクルの墓地に埋葬されたことまで明らかにしています。その地道な研究の積み重ねにただただ尊敬の念を覚えます。同時に、植物や庭園を愛することで国境を越えた文化の発展に寄与した畑和助はじめとする多くの先人たちの実践に、いとおしさを覚えないではられません。そして、ブルーストの小説には彼らの仕事の成果が反映されていることを以前より意識して読むようになりました。



上：パリのモンテスキュー邸。彼の姪の手前には、ユリやアジサイの鉢植えが置かれている。
下：1889 年の万博でトロカデロ庭園に展示された盆栽。
出典：鈴木順二『園芸のジャポニズム』(平凡社、2023 年)

Paysage français フランスの風景（１）Le beffroi de Douai ドゥエーの鐘楼

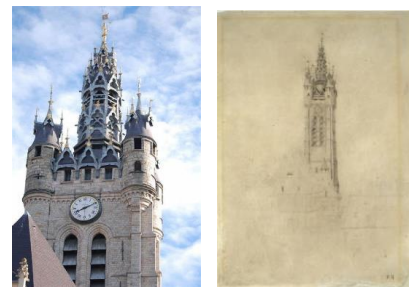
オリヴィエ・ジャメ

Ce premier article inaugure une série portant sur quelques sites de France dont de très grands écrivains ou artistes ont laissé de magnifiques illustrations. Nous irons aujourd'hui au sud de Lille, à Douai. (O. Jamet)
作家や芸術家たちが残した見事な画像とともに、フランス各地の風景を紹介する連載を始めます。第１回目は、リールの南にあるドゥエーの街に行ってみましょう。



1. Le beffroi de Douai vu par Victor Hugo ヴィクトル・ユゴーの見た鐘楼
Victor Hugo, de passage à Douai en 1837, y écrivait : « (...) le plus joli beffroi de ville que j'aie encore vu. (...) une tour gothique, coiffée d'un toit d'ardoise, qui se compose d'une multitude de petites fenêtres (...) superposées ; sur chaque fenêtre une girouette, aux quatre coins une tourelle ; sur la pointe du beffroi un lion qui tourne avec un drapeau dans les pattes ; et de tout cet ensemble si amusant, si fou, si vivant, il sort un carillon. (...) J'ai dessiné cette tour, et quand je regarde mon dessin, tout informe qu'il est, il me semble encore entendre ce joyeux carillon qui s'en échappait, comme la vapeur naturelle de cet amas de clochetons. » (extrait des *Œuvres Complètes de Victor Hugo, En Voyage, II*, BnF Gallica)

ヴィクトル・ユゴーは 1837 年にドゥエーに滞在したときに書いている。「私が見た町のもっとも美しい鐘楼は、スレート屋根でおおわれたゴシック様式の塔で、重なり合うたくさんの小さな窓から成る。それぞれの窓の上部には風見、四方には小塔がある。鐘塔の頂点に立つライオンは足元の旗とともに回転している。とても愉快で、頭がおかしくなりそうで、生き生きとしたこの全体から、カリヨンの音が流れてくる。(...) 私はこの塔のデッサンをした。まったく大ざっぱなものだが、それを見ると、小尖塔のこの積み重なりから天然の蒸気のように漏れ出てくる、この陽気なカリヨンの音がいまも聞こえてくるようだ」。『ヴィクトル・ユゴー全集 旅行にて』第 2 巻、フランス国立図書館電子図書館)



上：ドゥエーの街と鐘楼
左：鐘楼
右：ユゴーのデッサン, 1837 年

2. Le beffroi de Douai vu par Camille Corot カミーユ・コロアの見た鐘楼
Pour échapper aux troubles de la Commune (1871), Corot se réfugia à Douai. Au premier étage d'une maison donnant sur le Beffroi, il peignit ce tableau en milieu de journée. La construction du beffroi fut entreprise en 1380, sur l'emplacement d'une précédente tour en bois, afin de servir de tour de guet, et fut achevée en 1475. Un carillon y fut installé en 1391 dans le beffroi et rythme depuis la vie des Douaisiens.

パリコミュン(1871)の騒乱を逃れたコロアはドゥエーに避難した。鐘楼に面した家の二階で彼は日中この絵を描いた。この鐘楼の建設は 1380 年に着手され、それ以前の木造の塔があった場所に監視塔として作られ 1475 年に完成した。鐘楼にカリヨンが設置されたのは 1391 年で、以来、ドゥエーの人々の生活のリズムを刻んでいる。

Pourquoi ai-je ainsi écrit sur le Beffroi de Douai ? Parce que je m'étais moi-même rendu à Douai un week-end d'été, il y a une bonne cinquantaine d'années, à l'invitation de charmants amis Douaisiens, retraités de l'Education Nationale et très cultivés. Et ils m'en avaient fait faire connaissance, ainsi que de ses trésors acoustiques. Et ils m'avaient aussi parlé de la visite de Victor Hugo, de son dessin inspiré, et de Corot, fuyant la Commune, et de son beau tableau, de facture classique, et le temps a passé. Et puis les souvenirs sont revenus... Les uns après les autres. Toute cette région du Nord-Pas-de-Calais est très intéressante à visiter tranquillement, en été. Et la cuisine flamande est savoureuse.

このようにドゥエーの鐘楼のことを書いたのは、私自身約 50 年前に、国民教育省を退職した教養ある魅力的な友人たちの招待で、ドゥエーに訪れたことがあるからです。彼らは私に、街やその貴重な音響について教えてくれ、さらにはユゴーの訪問とデッサン、コミュンを逃れてきたコロアと彼の絵や伝統的な技法について、話してくれたのです。それから時間が過ぎました。思い出が蘇ってきました…次々と。このノール・パ・ド・カレー地域圏全体は、夏、落ちついて訪れるのにとてもおもしろいところ。フランドル料理も美味しいです。



コロア《ドゥエーの鐘楼》
1871 年、ルーヴル美術館

※ドゥエーの鐘楼は、UNESCO の世界遺産「ベルギーとフランスの鐘楼群」のひとつに登録されています。ネットで検索すれば (Carillon du beffroi de Douai と入力)、カリヨンの音色を YouTube で聴くことができます。ドゥエーにはパリ北駅から、TGV なら 1 時間 17 分、TER (地域圏急行) なら 1 時間 52 分で着くことができます。(編集部)

12 世紀ルネッサンスとパリ大学

角田 茂（つのだ しげる）

12 世紀ルネッサンスとは、米国の歴史学者、ハスキンス（Charles Homer Haskins : 1870-1937）が、著書『12 世紀ルネッサンス (The renaissance of the twelfth century : 1927) 』の中で提唱した概念であり、これにより、中世は暗黒時代であったという従来の見方が否定された。この時代、学問・科学の中心はアラビアのバグダードであり、これらの知見がスペインのトレードに運ばれ、ラテン語に翻訳され、誕生したばかりの大学に供給された。大学誕生の時期特定には難しい面もあるが、科学史的には 12 世紀ルネッサンスの時、制度を整えて誕生したと私は考えている。12 世紀には、ボローニャ大学、パリ大学、オックスフォード大学が誕生している。大学 (university) の語源、ラテン語の universitas はギルド的な組合であり、ボローニャ大学では学生組合、パリ大学では教師と学生の組合を意味していた。

我々が今使っている科学用語の中には、アラビア語起源のものがあり、その多くは 12 世紀ルネッサンスの時、西洋に入って来たものである。アラビア語の“al”は英語の定冠詞“the”に相当する。代数学(仏: algèbre, 英: algebra)、錬金術(仏: alchimie, 英: alchemy)、アルゴリズム(仏: algorithm, 英: algorithm)など“al”の付く科学用語は、アラビア語起源である。化学(仏: chimie, 英: chemistry)は、語源も実態も錬金術由来である。アルゴリズムと言うタイトルの教科書では、インド起源のアラビア数字を用いて 2 次方程式の解が求められている。この解、実際には、825 年にイスラームの数学者アル＝フワーリズミー (al-Khuwarizmi : 780-850 右画像) によって求められたものである。



ウズベキスタンのヒヴァにあるアル＝フワーリズミー像

パリ大学の創設は 1150 年と言われ、自由学科

(artes liberales) を教授する学芸学部 (facultas artium) の上に上級学部としての法学と医学があった。その後 1259 年に、上級学部として、神学者ソルボン (Robert de Sorbon : 1201-1274) が神学部を発足させ、上級学部は 3 学部となった。フランスの大学は、原則としてすべて国立である。私が留学した当時、パリ大学には神学部がなく、現在もないと思われる。これはフランス革命後の厳格な政教分離政策 (laïcité) によるものである。しかし例外的に、ドイツ占領下に置かれた歴史を持つストラスブール大学には、フランスでは唯一、神学部（プロテスタント神学部とカトリック神学部）が置かれていた。それゆえに、ノーベル平和賞を受賞したアルベルト・シュヴァイツァー（独：1875-1965：仏）はストラスブール大学で神学と医学を学ぶことができた。

パリ大学の体制は、約 40 年前、現在とは全く違い、第 1 大学から第 13 大学まであった。第 1 大学から第 4 大学までは文系の大学でソルボンヌ大学、第 5 大学は文系と理系（医学部を含む）の大学でルネ・デカルト大学、第 6 大学は理系（医学部を含む）のみの大学でピエール・マリー＝キュリー大学、第 7 大学は文系と理系（医学部を含む）の大学で、ドゥニ・ディドゥロの命名はまだなかったと思う。当時私が愛用していたミシュランのガイドブック『パリ』の索引に、大学名としてその名前は出て来ない。フランスではエリゼ宮をはじめ、国家の建物には、必ず自由・平等・友愛 (Liberté・Égalité・Fraternité) の標語が刻まれており、パリ大学校舎も例外ではなかった。セーヌ左岸旧市街（5 区、6 区）にはパリ大学の第 1 から第 7 ままで存在していた。中世の大学では、講義がラテン語で行われ、全ヨーロッパから集まる学生の共通語はラテン語であった。それゆえ、この地区は現在でもカルティエ・ラタン (Quartier Latin : ラテン語地区) と呼ばれている。

話はもとに戻るが、12 世紀、学術的に重要な役割を果たしていたスペインのトレードは美しい街である。マドリードから南西へ向けて、約 1 時間半電車に乗ると、古都トレードに着く。駅を降りてしばらく歩くと、タホ川の向こうに、中世の要塞都市トレードが、ジオラマのように出現する。この瞬間の感動は今でも、私の脳裏にはっきりと焼き付いている。ギリシャ出身のルネッサンスの画家、エル・グレコがこよなく愛した街である。12 世紀、この街ではユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒が共存し、経済的にも学問的にも、その繁栄を謳歌していた。まさに私にとっての理想郷である。

西洋中心主義を乗り越えたフランス人：ヴィクトル・セガレン

神澤 透（かんざわ とおる）

ポール・ゴーガン（Eugène Henri Paul Gauguin, 1848- 1903）から強い影響を受けたフランス人がいます。彼の名は、ヴィクトル・セガレン（Victor Segalen, 1879-1919, [右画像](#)）といいます。彼は、多方面で活躍した人です。フランス海軍軍医にして、詩人であり、小説家であり、エグゾティスムの理論家としても知られています。フランスにおいて、誰よりも密度の濃いエグゾティスム論を残したといえます。そして、旅人・探検家であり、ポリネシア・中国を活動範囲とする文化人類学者にして、中国学者・中国考古学者という側面を持っています。



セガレンは、ゴーガンが亡くなった後3か月にして、彼の終焉の地を任務で訪れています。その際に、『ノア・ノア』、『以前と以後』や、その他遺稿（セガレンは、ゴーガンの遺稿を読んだ最初の人物といってよいでしょう）を読み耽りつつ、セガレン自身は、それまでポリネシアについても、そこに住むマオリ人たちについても、何も見ていなかったと感じ取ったのです。そして彼は暫く後のことになりますが、「私はタヒティの人々を、ゴーガンが描くために見たやり方に適ったやり方で、すなわち彼ら自身において、しかも内側と外側の両方から、『書くこと』を試みました。一民族全体のあの天啓が、彼のタヒティの作品の中に充満していることが、私が彼をこの上なく称賛する点なのです」と1906年4月12日付のジョルジュ＝ダニエル・ド・モンフレ－宛の手紙に書いています。（セガレン『〈エグゾティスム〉に関する試論／羈旅』、木下誠訳、現代企画社、1995より引用）

そして、その試みとして、彼は、1904年に『記憶なき民』（原題 *Les Immémoriaux*）を書き始めたのです（出版は1907年9月）。この書は現在オデュッセイアのようにポリネシアの人々に読み継がれているそうです。



セガレンは、前述著書で、〈エグゾティスム〉の定義をあらゆる分野で行っていきます。まずは、その確信が記されています。「そして、直ちに〈エグゾティスム〉の感覚を定義し、定位するまでにいたること。〈エグゾティスム〉の感覚とは、異なるものの観念以外の何ものでもない。〈多様なもの〉の知覚、何者かが自分自身ではないということの認識以外の何ものでもない。そしてエグゾティスムの力とは、異なることを把握する力にほかならない」と書いています。

「〈多様なもの〉についての一〈美学〉としてのエグゾティスムについて。導入部—エグゾティスムの概念〈多様なもの〉」 “De l'exotisme comme une Esthétique du Divers. Introduction : La notion d'exotisme. Le Divers.”というタイトルがつけられている箇所、セガレンの本質的エグゾティスムの世界観が表わされています。

〈多様なもの〉とは、セガレンが最も大事にする概念なのです。〈多様なもの〉の認識こそ、この世界にあって、「生きた環境」を、それ自体として受け入れる素地だということです。また、それは新たに遭遇する世界観そのものであるといっても良いかもしれません。〈多様なもの〉とは、それまでの西欧中心主義的な主体が、「見たい、聞きたい」としていた事柄が、一方通行のものではないということをも表しています。彼は、ポジティブな私たちとしての *Le Divers* をしばしば口にします。それは自己にとって既知なるものに還元されることを拒む何ものかなのです。

現代社会では、至る所で多文化共生、多様性重視が唱えられていますが、セガレンは、20世紀初頭にそのような世界観を抱いていたのかもしれません。



アメリカでフランスのジャズに出会う 森岡 由紀子 (もりおか ゆきこ)

2020 年に奈良に引っ越す前、8 年半ほど夫の転勤でアメリカ南部のテネシー州メンフィスに住んでいました。メンフィスはミシシッピ川のほとりの街。19 世紀後半から 20 世紀後半、綿花取引で大変栄えました。それ以前から奴隷を使ったプランテーションの綿花栽培が盛んで、話すことを禁じられた奴隷は唯一許された歌でコミュニケーションを取り、それが心の叫びを表すゴスペル音楽となりました。そこから発展したブルースやソウルなどがメンフィスの音楽で、エルビス・プレスリーもメンフィスの人です。音楽以外ではキング牧師暗殺が人種差別撤廃運動の発端となった場所でした。



香港からメンフィスに引っ越した 2011 年、楽器演奏に燃えていた高校生の双子の息子が出会ったのが **Stax Music Academy** という高校生の放課後音楽プログラムでした。かつてソウル音楽で世界を制覇したレーベルの伝統を守り後世に伝えるプログラムです。

メンフィスの経済的に恵まれない子供たちが中心ですが、オーディションで普通の高校生も参加できます。見学を訪れるとパワフルな音楽に親子共々圧倒されました。決して安全な地区ではありませんが、強い意志でそこで学ぶことを選択した息子たちのため、私は高速で片道 40 分運転をして送迎をすることになったのです。私はレッスンの待ち時間、ボランティアで先生のアシスタントをしました。

よく知らずに飛び込んだのですが、毎月グラミー賞クラスの有名アーティストが来てワークショップで生徒に教えるのをみて、だんだん有名な場所であることがわかりました。とはいえ、有名人がきても写真一枚撮る人もなく、いつの間にか私は写真係となり、写真を送るためにアーティストさんたちとも連絡を取るようになりました。

そんなある日、ジャズピアニストで大学教授のドナルド・ブラウンがやってきました。アート・ブレイキー & ジャズメッセンジャーズというジャズで一世を風靡したグループ出身で、大学で教鞭をとっていました。息子たちの演奏をみて気に入り、その後レッスンに通うことになりました。月一回車で片道 7 時間かけて通いましたが、マジックのように上達が目に見える素晴らしいレッスンでした。その後、双子は彼がいる大学で学び、彼がプロデューサーになってレコーディングもしました。彼は、素晴らしい先生であるだけでなく、アーティストとして、アメリカに加えてフランスでも人気が高く、フランス人のマネージャーがいてレコーディングもパリで行う人でした。

彼のおかげで、フランスの有名ジャズアーティスト、**Manuel Rocheman** と出会い、双子は遠隔レコーディングや米仏共同助成金プロジェクトに応募するプロジェクトを一緒にすることになりました。私もフランスのジャズ事情を学ばせてもらいました。フランスは、フランス文化啓蒙を国家事業とし、国の助成金の他に、大企業も基金を作って、さまざまな文化活動を助成してフランスの芸術家の海外の活動サポートしています。次点でしたが、双子にとっては最終選考まで残った思い出深い米仏プロジェクトとなりました。

即興音楽のジャズは様々な国の音楽を取り入れてそれぞれの場所で独特に進化していく音楽です。ジャズというアメリカの音楽が、フランスと私を再び結びつけてくれました。帰国前の数年間、私はメンフィスのジャズラジオ



局の DJ となり、フランスのジャズ事情を紹介する番組をいくつか制作して、アメリカのラジオ局で放送しました。たくさんのフランスのジャズアーティストと繋がって彼らの素晴らしい曲をたくさん紹介させてもらいました。

音楽は世界をつなぐと言います。音楽に導かれて私はアメリカだけでなく、たくさんのフランスのジャズアーティストと知り合え、とても楽しい経験となりました。

ラジオ番組の YouTube リンク : <https://youtu.be/L-Xi7WYANJk>

リヨン少年合唱団受け入れの思い出

中野 愛弓 (なかの まゆみ)

2009年7月のある日、翌年2010年の夏に、1200年伝統を守り歌い続けている世界的有名な合唱団でもあるリヨン少年合唱団が日本遠征公演の為に来日し、奈良公演開催に向けて、当協会に支援の依頼がありました。当時事務局のお手伝いをさせていただいていた私は、日仏交流のイベントが出来ると、只々嬉しくて、ワクワクしたことを今でも覚えています。

その日から、一年先のリヨン少年合唱団の受け入れの準備が始まりました。コンサートの日取り、会場探し、宿泊先(受け入れ先)、移動手段、食事、奈良滞在時の日程、そして、その経費等をどう算出するか。難題は山積みでしたが、当時の坂本成彦会長をはじめとする理事の皆さんの人脈とご尽力のお陰で一つ一つクリアして、一年という準備期間があっという間に過ぎました。

リヨン少年合唱団一行の滞在期間中、東大寺で歌の奉納、奈良県副知事訪問、奈良公園、奈良町散策、そして期間中、宿泊先として受け入れていただいた天理教訪問と交流会と盛り沢山の日程となりました。

そして、リヨン少年合唱団の公演は、ならまちセンターの計らいで、『わらべうたフェスタ交流コンサート』として開催させていただくことができ、立ち見が出るほどの大盛況。コンサートには、「まつぼっくり少年少女合唱団」が友情出演。フランス民謡「アヴィニョンの橋の上で」と日本唱歌「夏の思い出」で歌の国際交流という素敵なコンサートとなりました。またコンサート後の交流パーティー(右画像)では、子供たちが手をつないで日本のわらべうた「なべなべ」で盛り上がり、言葉の壁を越えて、笑顔で楽しむ子供たちの姿を見てところが和み、平和であることの素晴らしさを感じました。



13年たった今でも、昨日のように思える、私にとっても、貴重な経験をさせていただいたイベントで、ご協力いただきました皆様への感謝の気持ちは忘れることなく、この交流が平和への小さな種まきとして成長してくれますことを願うばかりです。

初夏のフランスとフォンテーヌブローの森

中西 さおり

フランスは5月の下旬を迎え、ようやく新緑の眩しさを感じる季節となりました。6月に入ると午後9時半ごろまで明るく、Nuit Blanc(白夜祭と呼ばれ、町のあちらこちらで現代アートの展示やコンサート、文化的イベントがオールナイトで行われます)やFête de la musique(音楽祭)などがパリやフランス全国各地で開催され、初夏を迎える準備が始まります。この頃になると、早くも夏のバカンスについて「今年の夏はどこへ行くの?」といった会話があちらこちらから聞こえてきます。

日本人には日焼けは大敵ですが、長く暗い冬を過ごしたフランス人にとって、太陽の光はようやく訪れた大切な自然の恵み。お天気のいい日には待っていました!と言わんばかりにカフェのテラス、公園の芝生、セーヌ川沿いにはこぞって日光浴をしている人達を目にします。こんがり日焼けした肌=私はバカンスに出かけたのよ、いいでしょ?とちょっぴり自慢の意味が含まれていることもお忘れなく!

ところで、我が家の近くにあるフォンテーヌブローの森も新緑が素晴らしい季節となりました。面積172km²とパリの街をすっぽり包み込むくらい広大な森は、年中ハイキングを楽しむ人が多く訪れる場所です。そしてもう一つ、多くの人を魅了しているのがL'escalade de bloc、ボルダリングです。ボルダリングをする人たちにとってフォンテーヌブローの森はまさに聖地。大きなマットを背中に背負い、よじ登る岩を探す人たち、難易度の高そうな岩を手と足を器用に岩の穴にかけて登る人たちの姿を見かけます(右画像)。

また、フランス国内だけではなくヨーロッパ圏から訪れる人も多く、英語やドイツ語などの言葉をよく耳にします。この週末もボルダリング愛好家で賑わっていました。フォンテーヌブローの森は四季を通していろいろな楽しみ方ができる森なので、機会がありましたら皆さまもぜひ一度お越しください!



※中西さんは今夏も日本に里帰りされるそうです。カフェで有志の集まりができればと思います。(編集部)

キッシュのレシピ

市谷 栄津子（いちたに えつこ）

今年の1月に友人の勧めで奈良日仏協会に入会しました。昨年12月の段階ではまだ入会していませんでしたが、画家の南城さんのアトリエで開催された美術クラブ例会に参加しました。美術の講演後に、持ち寄りパーティーをするということで、私はキッシュを作って持参しました。そのレシピを紹介して欲しいとの要望にお応えして、下記のようにまとめてみました。

キッシュ（Quiche）とはフランス北東部のアルザス・ロレーヌ地方で生まれた家庭料理で、パイの一種です。作り方はとても簡単で、卵や生クリーム（または牛乳）、チーズ、ベーコン、野菜などを混ぜ合わせた卵液（アパレイユ）を作り、それをパイ生地やタルト生地の中に流し入れてオーブンで焼いたものです。ロレーヌ地方では、春の訪れを祝う祭りが5月に開催されており、その時にキッシュが必ず作られていたようです。焼き立てはもちろん、冷めてから食べても美味しく、フランスだけでなく、ヨーロッパ、アメリカなどでもとても人気があります。

先日の5月に英国で行われたチャールズ国王3世の戴冠式の記念メニューに、ほうれん草のキッシュが選ばれ、「コロネーション・キッシュ Coronation Quiche」として、昼食会で招待客に振る舞われたとのことです（英王室の公式サイトでレシピや動画が公開されています）。基本的には野菜料理であり、チャールズ国王も普段からよく召し上がっておられるようです。

通常「キッシュ・ロレーヌ」は、ほうれん草の代わりに玉ねぎを使うのですが、今回はチャールズ国王戴冠式記念メニューにあやかって、ほうれん草のキッシュを取り上げました。

材料：

（パイ生地には冷凍パイシートを使うので、とても簡単です。18cm タルト型。）

冷凍パイシート	2枚
ほうれん草	2束（塩茹でしてベーコンと共に炒める）
ブロックベーコン	50g
卵	2個
牛乳	100cc
生クリーム	100～150cc
グリュイエールチーズ	50g
塩、胡椒、ナツメグ	適量



作り方：

1. 解凍した冷凍パイをまな板などの上に置き、綿棒でタルト型より一回り大きく伸ばします。タルト型に敷いて、縁を1cmほど残して、余分な部分を切り落とし、その部分にフォークで数箇所穴を開けます。
2. ほうれん草を塩茹でして、3cm幅に切り、5mm幅に切ったベーコンと炒めて、少し冷ます。
3. ボールに卵、牛乳、生クリームを入れてなめらかになるまで混ぜる。
4. 1で作っておいたタルト型に2、そして3を流し入れ、グリュイエールチーズを上に乗せる。
5. 200度のオーブンで25分ほど焼く。

入会前後から、日仏協会の集まりに何度か参加させていただきましたが、会員の皆様のフランスに対する真摯な、そして熱い情熱に大変刺激を受けております。これからもよろしくお願いいたします。

※昨年12月24日に開催された美術クラブ例会では、参加者一人一人がワイン・チーズ・おつまみ・お菓子・デザートなどを一品ずつ持ち寄り、楽しい懇談のひとつきを過ごしました。市谷さんが持参してくださったキッシュはとても好評でしたので、Mon Nara にレシピを寄稿して下さるようお願いしました。（編集部）

私とフランス

鈴木 まゆみ

2年前の4月、70才を前にしてそろそろ“脳活”をと始めたのがラジオ講座のフランス語でした。三日坊主にならぬよう家族や友人に宣言して始めたものの、50年ぶりの「フランス語」は初級編でも難しく、応用編はチンプンカンプン、想像以下の語学力に自信をなくしました。ひとりでラジオに向かって、ただ聞き流しているだけの学習で上達するはずもなく、1年半ほど経った頃、たまたま奈良日仏協会のホームページを見つけ、その中にシネクラブ例会の案内がありました。しかもその会場が自宅から近い！ とにかく一度見学してみよう！ 思い立ったが吉日！ そして次の例会で入会をお願いしました。

私と「フランス」との繋がり（関わり）は、50数年ほど前に、大学の文学部仏文科に入学した時に始まりました。しかしその入学動機は、希望していた進路を諦めねばならなくなり、ならばお洒落な（？）仏文科がいいかな…？ となんとも軽薄なお恥ずかしいものでした。それからの4年間は、ただ単位を落とさず、留年しないよう心がけ、何とか卒論を書き上げて卒業することが出来ました。しかし、そこで繋がり（関係）は切れてしまいました。フランスの真の魅力が解らず、見つける努力もしないまま過ごしてしまった大学時代は、大げさかもしれませんが、私の劣等コンプレックス、黒歴史なのです。

それが半世紀経って、何故、今更フランス語を学び直したいのか？ 自問しているうちに、ふと学生時代に貴重な体験をしたことを思い出しました。それは、大学3年生の7月から8月にかけて参加した2ヵ月間のヨーロッパ研修旅行です。前半1ヵ月はドイツ他8か国を巡り、後半1ヵ月をフランスとベルギーでホームステイを体験しました。拙い会話力でホストファミリーと意志疎通を図らなければならず、悪戦苦闘の毎日でしたが、辛かった思い出はありません。

最初のホームステイ先はリヨン郊外のラ・ボワス（La Boisse）という田舎町でした。ホストファミリーと一緒に過ごした15日間の生活では、リヨンの街やロワール川沿いの古城を案内してもらったこと、そこで見た風景がとてもきれいだったことなど、次々と楽しかった思い出が甦ってきました。

次のパリでは10日間ほど、南部郊外のカシャン（Cachan）という地区にホームステイし、そこを拠点にしてパリの街をあちこち巡りました。当時の市バス128番やメトロの4号線と1号線を乗り継いで市の中心部に出て、チュイルリー公園、セヌ河畔、植物園をぶらぶらと散策したりしました。帰宅して夕食時にステイ先のマダムから「今日はどこへ行ったの？」と訊かれると、流暢ではなくても片言のフランス語で答えていました。日曜日には近所のカトリック教会に連れて行ってもらったこともありました。

最後はベルギーのブリュッセルの家庭で8日間過ごしました。こうして1ヵ月余りを、様々な文化に触れながら、とても充実した時間を過ごすことができたのです。

現在のようにSNSで詳細な情報を得ることが出来なかった時代ですから、実際に見聞し体験したことは感激し驚くことばかりだったはず。この貴重な体験を50年もの間すっかり忘れていたのです。私が「何かを学び直したい」と思った時、頭の片隅で眠っていたその記憶が目覚め、私と「フランス」の繋がりを復活させてくれたのかも知れません。



リヨンの街



ロワール川沿いの古城（シュノンソー城）

美術クラブ第7回例会「ルーヴル美術館展 愛を描く」鑑賞会のご案内

今回は、フランスが世界に誇る美術の殿堂が所蔵する珠玉の絵画コレクションから厳選された「愛」の名画 73 点を鑑賞します。ナビゲーターによる事前解説と鑑賞後の相互の語らいで、絵画の理解がより深まることと思います。

- ❖日時：7月6日（木）13:40～16:30
- ❖会場：京都市京セラ美術館
- ❖会費：会員無料、一般 500 円、展覧会入場チケットは各自購入のこと。（前売りがお勧め。6月26日まで）。
- ❖集合時間・場所：13:40 に、美術館 1F 中央ホールに集合（参加者には詳細案内）。
- ❖問合せと申込先: sugitani@kcn.jp tel:090-6322-0672（杉谷）
- ❖定員:20 名
- ❖ルーヴル美術館の膨大なコレクションの中から、今回の展覧会は 17 世紀から 19 世紀前半までの「愛」を主題としたフランス絵画が集められています。画家の名前をあげると、ブーシェ、ジュエール、ヴァトール、フラゴナール、ドラクロワなどです。まず全員そろって入館する前に、カラー4頁の資料を配布し、全部を見るのはたいへんだと思う人のために、「この8点は見逃せない、選りすぐり作品解説」を行います。あとの懇親会では、さらにカラー4頁の資料を配布し、「ルーヴル美術館とフランス絵画」の解説、さらにその日に鑑賞した作品の感想を述べあい、また「私とルーヴル美術館」の主題のもとに、ルーヴル体験をお持ちの方には、それを自由に語っていただきたいと思っています。ルーヴル美術館の巨大な全貌をとらえることはとても不可能ですが、みなさんと一緒に少しでもその一端に親しむ機会となれば幸いです。（ナビゲーター：三野博司）



フラゴナール「かんぬき」
『ルーヴル美術館』〈Discover〉より

フランス総領事主催「桜咲く 4月1日アペリティフ」参加報告

ジュール・イルマン在京都フランス総領事が、長崎、広島、島根、鳥取、姫路、大阪、奈良、京都、三重、金沢、岐阜、名古屋など、西日本各地の日仏協会のメンバーを日仏学館に招待してくださり、日仏交流の楽しいひとときを過ごしました。シャンパンで乾杯後アペリティフを口にしながら、参加者同士が互いの地方の特徴や近況を話しました。当協会からは会長・副会長・事務局長の3名が参加しましたが、イルマンさんご夫妻が参加者一同を心からもてなす姿が印象的でした。ご夫妻、そして行事全般をお世話くださった北川様にあらためて感謝申し上げます。

《2022 年度第6回理事会報告》…事務局 日時:2023年5月25日(木)15:00～16:45。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、菌田、中辻、藤村、杉谷。議題1. 会員数確認。議題2. 3/16 理事会後の活動：(3/18) 第152回フランス・アラカルト「多言語国家スイスでの暮らし」。議題3. 今後の行事：(6/10) 第153回フランス・アラカルト「イギリスとフランス」、(7/6) 第7回美術クラブ例会「ルーヴル美術館展」鑑賞会、(7/30) 第60回シネクラブ例会『ろばと王女』、(9/10) 第153回フランス・アラカルト「ピエール、フランス映画を語る」、(10/22) ガイドクラブ「会津八一の歌碑をたずねて」、(11/23) 秋の教養講座・講師赤木睦代。議題4. Mon Nara 通信 No.15、Mon Nara No.302 6/12 発送予定。議題5. その他：フランス総領事主催「花咲く 4月1日アペリティフ」、30周年記念行事、講座表掲載基準。次回理事会7月20日(木)15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆「ユリの花」(fleur de lys) はキリスト教世界では純潔を象徴し、西洋絵画で白いユリがマリアへの受胎告知の場面に描かれているのを目にしますが、元来ヨーロッパで咲いていたのは主に白いユリでした。☆日本では、白色の他に、朱・赤・黄・ピンクなど彩り豊かなユリが自生していました。17世紀末出島に滞在したドイツ人医師ケンペルは日本の「カノコユリ」に魅せられ、「ピンクを帯びて輝くばかりに白く、とてもすばらしく美しい花」と記しています。☆19世紀前半に日本に滞在したシーボルトは、生きた「カノコユリ」をはじめてヨーロッパに持ち帰ることに成功しました。その後、カノコユリはまたたく間にヨーロッパで人気を博し、1889年パリ万博の日本園でも栽培・展示・販売され、訪れる人たちを魅了していました。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2023年10月号は**9月30日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「Mon Nara」(2月、6月、10月発行)又は「Mon Nara 通信」(4月、8月、12月発行)に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2023 年 6 月号 numéro 302

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司